

升川遺跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1994-254-01

1994

1994
254
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

ます かわ
升 川 遺 跡
発 挖 調 査 報 告 書



平成 6 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、升川遺跡の調査成果をまとめたものです。

升川遺跡は山形県の北西部、秋田県境に程近い鮎海郡遊佐町大字直世にあり、秀峰「鳥海山」南西麓の山裾に位置しています。

遊佐町は稲作を主産業とする農業の町ですが、とりわけ本遺跡の所在する高瀬地区のお米は鳥海の清冷な湧水によって、格別おいしいとされること、あるいは河川の清流に多くの鮭が遡上するところとしても有名です。当地の自然環境がいかに清新で豊かであるかを物語っているのでしょうか。

調査では、平安時代から鎌倉時代と考えられる集落跡が検出され、中でも礎石立の規則的な配列の見られる建物跡が目を引きます。同時に出土した輸入陶磁器や鉄製品、木製品などの遺物も注目に値すると考えられます。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産です。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区域内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対応するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え、本県埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は県営ほ場整備事業（洗沢川地区）に係る「升川遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育委員会の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名 升川遺跡（AYZMK） 遺跡番号 県遺跡番号2240
所在地 山形県鶴岡市遊佐町大字直世字升川
調査期間 発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日
現地調査 平成5年8月3日～平成5年9月17日 27日間
調査主体 財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 4 発掘調査担当

調査研究課長 佐々木洋治
主任調査研究員 佐藤 庄一
調査研究員 阿部 明彦
調査研究員 斎藤 俊一
- 5 資料整理担当

調査研究課長 佐々木洋治
調査研究員 阿部 明彦
嘱託職員 黒坂 広美
- 6 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所、月光川土地改良区、遊佐町升川地区、遊佐町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。
ここに記して感謝申し上げる。
- 7 本書の作成・執筆は阿部明彦が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。
- 8 現地調査における全体図等の平面図（1/40, 1/100）の作成は株式会社シン技術コンサルに業務を委託した。
- 9 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。
- 10 調査報告書の作成にあたっては福島県文化センターの飯村均氏にご教示を賜った。記して感謝申し上げたい。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

S B：建物跡 S K：土壤 S X：性格不明 S D：溝 S P：柱穴・ビット
S A：柱列 S G：河川 E B：掘り方 R：遺物 R P：登録土器 S：石
W：木製品 M：金属製品 F：包含層
- 2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号を踏襲したが、建物跡等は本書で新たに追加したものがある。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は真北方向に合わせた。
 - (3) 遺構実測図は、1/20・1/40・1/80・1/160・1/200で採録し、各々スケールを付した。
 - (4) 遺構エレベーションや断面図中のスクリーントーンは主として柱根、あるいは一部の柱底を表している。
 - (5) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中のスクリーントーンは主として黒色処理を表している。
 - (6) 遺物図版について、1/3を基準とするが、一部に任意のものがある。
 - (7) 遺物観察表中の計測値は現存値である。また、出土地点欄での層位では、Fは遺構覆土内、ローマ数字は基本層序の土層番号を表し、包含層出土としたものの方には基本層序のIIないしIII層から出土したものと示している。
 - (8) 遺構覆土の色調記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の概要	3
IV 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	4
2 遺構と遺物の分布	4
V 検出遺構	
1 据立柱建物跡・柱列跡	7
VI 出土遺物	
1 古代の土器	18
2 中世の土器	24
3 木製品	28
4 土・石製品	28
5 金属製品	28
VII まとめ	31

挿 図

第1図 遺跡位置図	2
第2図 遺跡概要図	3
第3図 土層柱状図	4
第4図 遺構配置図	5
第5図 遺構実測図(1)	10
第6図 遺構実測図(2)	11
第7図 遺構実測図(3)	12
第8図 遺構実測図(4)	13
第9図 遺構実測図(5)	14
第10図 遺構実測図(6)	15
第11図 遺構実測図(7)	16
第12図 遺構実測図(8)	17
第13図 遺物実測図(1)	19
第14図 遺物実測図(2)	20
第15図 遺物実測図(3)	21
第16図 遺物実測図(4)	22
第17図 遺物実測図(5)	25
第18図 遺物実測図(6)	26
第19図 遺物実測図(7)	27
第20図 遺物実測図(8)	28
第21図 遺物実測図(9)	29
第22図 建物跡配置図	32

表

表1 遺物観察表(1)	29
表2 遺物観察表(2)	30
表3 遺物観察表(3)	30

図 版

図版1 調査区全景	
図版2 調査区全景	
図版3 調査風景	
図版4 調査区近景	
図版5 S B柱穴群近景	
図版6 S P・E B柱穴検出状況・土層断面	
図版7 S P・E B柱穴検出状況・土層断面	
図版8 S K145土壤遺物出土状況他	
図版9 E B検出状況・土層断面	
図版10 出土遺物(1)	
図版11 出土遺物(2)	
図版12 出土遺物(3)	
図版13 出土遺物(4)	
図版14 出土遺物(5)	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

遊佐町北西端部に位置する直世地区は、鳥海山の山麓に抱かれた小さな入り江状の地形が発達し、山裾に沿って本遺跡をはじめとする舟森・小山崎・吹浦遺跡他の10数箇所に及ぶ遺跡が点在している。中でも地点を違えながら継続して當まれたと考えられる繩文時代遺跡の分布状況が注目され、この地域を中心として活躍した先人の生活領域が確固たるものとして保持され続けたことが推測される。このような遺跡分布の意味するところは、この地の自然環境が豊かであることを端的に表し、鳥海山からの清瀬や伏流水に係わる鮭・鰐類の水産資源等も今日的状況ながら過去にも満ってとらえられるべき事象と考えさせる。

一方、今まで幸うじて残されてきたこのような遺跡群は、近年の大規模で継続的なほ場整備事業他の開発の波を直接かつ広範に受けるようになってきており、その保護と今日の課題との調整が急務となってきた。今回の調査も、本年度に実施される県営ほ場整備事業（洗沢川地区）を原因とし、調査に先だつ平成4年秋には、遺跡の保存状況や範囲他の確認を目的とした詳細分布調査が県教育委員会によって行われた。その後、調査結果を基とした保存協議、施工方法を含めた事前の調整が重ねられてきた経過がある。しかし、止むを得ず壊れると判断された部分については記録保存を目的とした緊急調査が計画され、山形県埋蔵文化財センターが主体となって調査実施の運びとなったものである。

2 調査の方法と経過

調査は遺跡域の北東縁辺部に係る2,000平方mを対象（第2図参照）として実施したもので、調査区の設定からはじめて、表土の除去、面整理、遺構検出他一連の手順で進められた。以下に各作業の工程と経過を略記しておく。

平成5年8月3日、現地プレハブ事務所へ器材等の搬入、用水等の確保と事務所内外の環境整備を行い翌日からの調査に備える。

8月4日、ほ場整備の大割杭を用いて調査区の測量と設定を行い、境界となる四周の布掘りを幅30cmで行う。また、土層の堆積状況を把握する目的で設けた中央の十字トレーンチの様子から、遺構・遺物の出土層位、遺構検出面までの深さ等を確認した。

8月5日から8月10日までの延べ4日間にわたり、重機を投入して表土の除去作業を実施した。併行して、遺物を検出しながら遺構検出に向けての面整理を行っている。なお、8月11日から8月17日までの間、お盆休み等のため現地での作業を休止した。8月18日より本格的に遺構の検出に取り掛かったが、内外からの出水に悩まされ、排水と併行しての作業となった。その後、8月26日までに大方の遺構を検出し終え、遺構配置図（1:100）を作成して白線でのマーキングと検出状況等写真撮影、遺構登録等の作業を進めた。

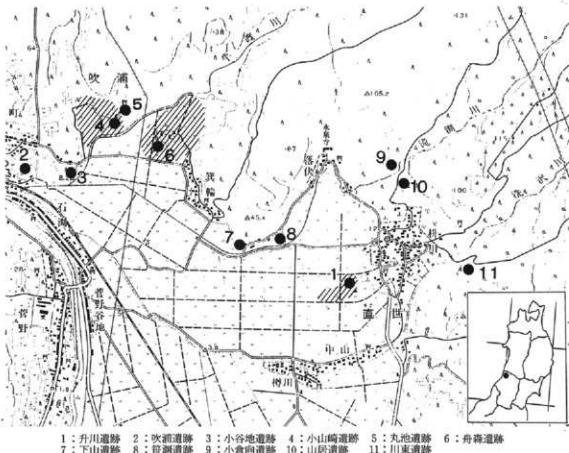
8月31日以降、遺構・遺物の精査を続行し、平面・断面図作成ほかの諸記録作業と空撮による最終測量（9月13日）、あるいは現地説明会を9月9日に開催するなどして（一般参加者70名）、予定通り9月17日に終了・同日器材を撤収している。

II 遺跡の立地と環境

本遺跡は升川集落の西南方に隣接し、現地形から見て山裾から平地への移行部に係る舌状台地上、標高4.8mから6.8mを測るやや小高い緩斜面に位置している。また、地理的立地からすれば、洗沢川が土砂を押し出して形成した小扇状地の扇端部に当たると考えられ、湧水帯あるいは泡炭地帯との境界域を意図して選地しているとも理解できよう。

平成4年10月に実施された詳細分布調査の結果を見ると、遺跡周辺に設けた試掘坑257箇所の内、200箇所以上で泥炭層の存在が確認され、微高地の伸張に沿って遺構や遺物の分布が認められた。遺跡範囲は東北東から西南西の方向に延びる東西170m、南北80m程の広がりがある。また、遺物や遺構のまとまりから、東西に分かれる二つの集中地点が存在することも予測された。一つは今回の調査地点であり、もう一つは平安時代中期を主体とする西側部分のまとまりである。なお、後者では遺構面までの深さが増し、上部に堆積する土層の厚くなる傾向が顕著であった。人為的な区画整理他の影響によるとも考えられるが、それにもまして自然の營力による堆積の発達が大きいと見るべきだろう。

このように、本遺跡の概略は分布調査段階でもある程度把握できたが、調査結果に見る遺構群のあり方、あるいはその帰属時期が12世紀中葉から鎌倉初期頃と認められる様相は想像もつかなかったことである。この時期の遺跡と言えばすぐに「大幅遺跡」の存在が思い起され、時期的重なり等から相互の関連や性格的相違が注目される所である。



第1図 遺跡位置図 (1 : 50000)

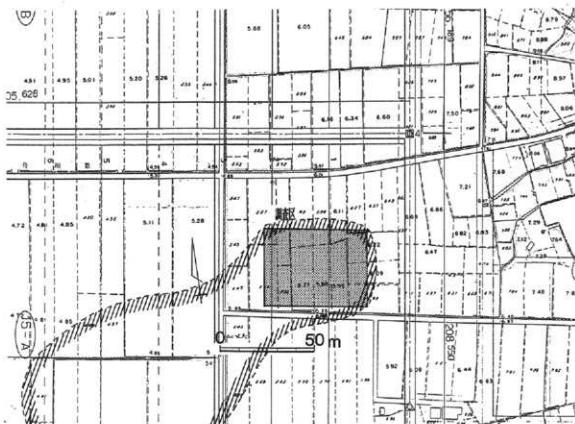
III 調査の概要

今回の調査は遺跡域の北東縁辺に係る2,000平方mを主な調査対象区として実施したもので、調査工程と経過については既に記した通りである。以下に調査基準とした事項や方法を中心に列記し、検出遺構と遺物については後項に述べることとする。

1) 調査区の位置・内部の区画等を示すグリッドは南北方向にY軸(0~4)、東西方向にX軸(A~F)の座標を設けて設置し、各々を10m単位で区切った。従って、一区画は10m四方となり、X・Y座標の各交点左上を代表させてその右下のグリッド名としている。例えばB-1グリッド等である。また、Y軸の方は正南北方向とした。

2) 遺物の取り上げはグリッド杭の設置以前段階では包含層の上下位により区分し、設置以後は各グリッド毎に行なった。特筆すべきものについてはR・P番号を付して地点・レベル等を記録している。一方、遺構内からの出土遺物は、覆土層位に従て「F 1」等の表記で取り上げ、重要なものについては包含層同様にR・P番号を付けて出土状態等を平面図に起こしたところがある。また、検出遺構は検出順や建物跡等のまとまりを考慮しながら通し番号を付け、100分の1概略図(遺構配置図)と遺構台帳に各々記入して登録した。

3) 全体の遺構平面図はシン技術コンサルに委託して、40分の1及び100分の1で作成している。断面図類は基本的に20分の1で記録し、土色等の注記を凡例にも記したように「新版標準土色図」に依っている。



第2図 遺跡概要図 (1 : 2000)

IV 遺跡の概観

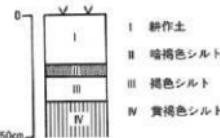
1 遺跡の層序

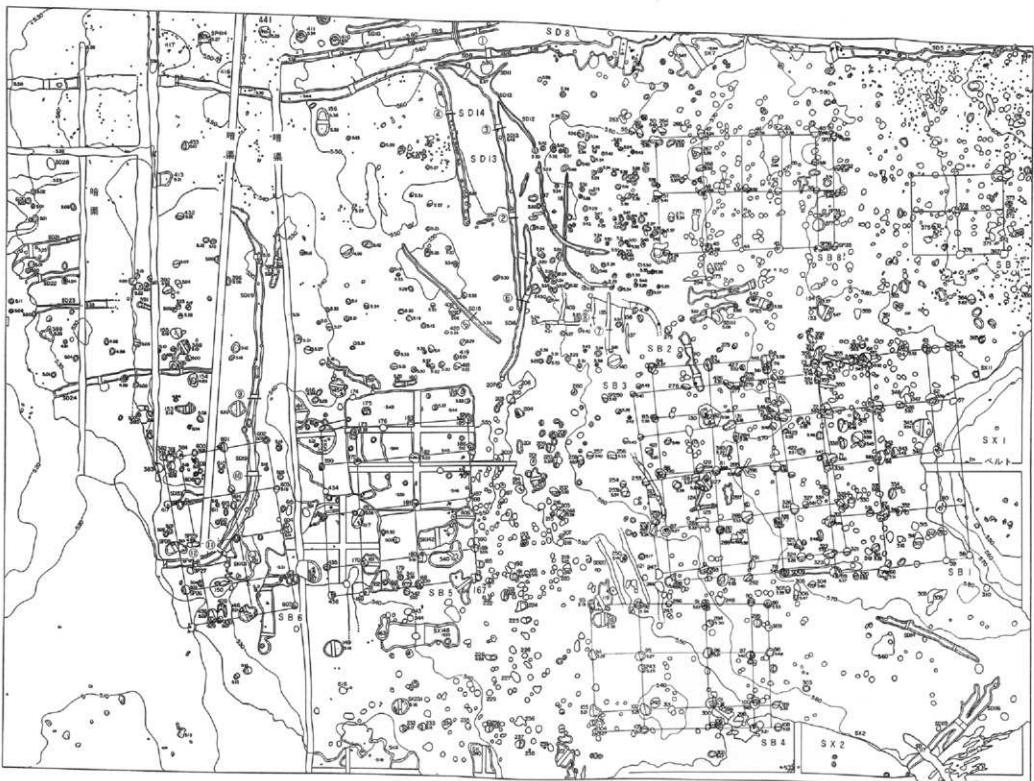
遺跡における調査区の位置は、遺跡北東端部であり、遺跡全体から観れば、耕作土以下のII・III層が総体に薄い所であった。また、遺跡の一次的な発見の契機ともなる戦後に行われた一反は場への区画整理事業等により、上部層のかなりの部分が削られて移動された形跡も認められる。

なお、調査区中央部での土層状況を、右の第3図に掲げたが、調査開始直後の時点で判明した所見を加えておく必要があるだろう。III層を削りながら掘り下げて行くと、IV層直上のあたりに1cm内外とごく薄い黒色炭化物層の広がりが所々に認められた。いわゆる「生活面」と認識できる部分の遺存する箇所である。分布は主に、建物跡が中心的に位置するB～D-1～3グリッドの範囲であった。従って、柱穴や溝跡など遺構の最上部に載る覆土もほぼ同様な土層状況を呈し、それらを辿ることで時期的同時性等の見当が付けられる場合があった。この薄い黒色炭化物層中には、珠洲系の陶器や点数とすれば少ないながら白磁・青磁等が主体的に含まれており、白磁等の存在と珠洲系陶器の様相等から中世でも12世紀中葉段階頃と考えられる古い遺物相を示すと判断できた。調査区南西部～南東部は総じて低温で、S X 1他に泥炭層の堆積とグライ化の進んだ状況を認めている。

2 遺構と遺物の分布

検出された遺構は2,000平方mの調査区内一面に所狭しと密集しており、調査地点が遺跡域の中心的部分であったことを物語っている。遺構の内容は掘立柱建物跡、礎石建物跡、門跡、側溝を有する道路跡、区画等の溝跡、土壤、および建物を築くための整地地業などである。建物跡他の分布は、第4図の遺構配置図や第22図建物跡配置図等に示す通りであるが、配置や規模、構成において注目すべき内容があると窺えた。すなわち、建物の配置が主殿・脇殿の様相を持つことやその主軸方位が真北を旨とするらしい等の諸点である。詳しくは後項に譲るが、本遺跡の性格を表す一点と捉えられる。以下に位置関係の概略を記しておく。便宜上、SB 1～3を中心的な建物とし、その前面を西方と仮定すると、北側にSB 7・8、南側にSB 4が位置し、さらに前方にSB 5やSB 6の建物が配置された状況を見て取れる。但し、SB 1～3の間で重複が認められ、掘立式のSB 2やSB 5の主体となる時期、礎石立のSB 1・2・5・8等が主体的な時期、及びSB 4の加わる時期等の少なくとも三時期程度の変遷が存在することも見過せない。一方、検出当初は用・排水に関係する水路と考えたSD 8・9の溝跡が、これら建物跡の北側を東西方向に走り、一本柱列の門跡と並行していた。恐らく建物域の北を限り、外部へと通ずる道路跡と考えてよいものだろう。遺物の分布状況は既に記した通りであるが、平安時代に帰属する遺物はSB 5の構築に関わって整地されたST 2・3として認識された部分及びその周辺に集中する土壤内を主体に出土したことを付記しておく。





0 5 10m
(1 : 200)

第4図 遺構配置図

V 検出遺構

1 堀立柱建物跡・柱列跡

S B 1 建物跡（第5図）調査区の東端部、E—2グリッドに中心をおく東西二間、南北四間の南北棟で、東側に廟を持つ。掘り方は、径60cm前後で確認面からの深さ30~40cmを測り、礎石の根石と考えられる5・6cm~30cm大の河原石を、数個から5・6個程度詰め込むものが大方であった。柱間（中心間距離）は梁行の柱穴69~58間で250・358・124cm、同70~60間で262・336cmを各測る。同じく桁行の柱穴69~73間で272・316・254・250cm、同68~64間で313・302・250・286cm等となる。以上から概略、梁行で9尺・11尺、桁行9尺等間、及び3尺廟と覗えた。主軸方位はN—5°30'—Wである。なお、S B 3・S X 1と重複し、S B 3を切り、S X 1に切られる関係が認められる。

S B 2 建物跡（第7図）S B 1 にはば平行して位置する東西二間・南北四間の南北棟である。S B 3と重複しS B 3を切る状況が確認される。梁行は柱穴88~84間で278・310・288・270cm、桁行は柱穴88~78間で272・326cmを各測り、梁行9尺・11尺、桁行9尺等間の建物と捉えられる。掘り方は径60cm前後のものが多く、2・3個から5・6個までの疊詰めの形式をとる。S B 1 同様の礎石建物と考えられるが、柱穴87では角柱が遺存していた。建物の主軸方位はN—4°30'—Wとなり、ほぼS B 1 に同一と言えるだろう。

S B 3 建物跡（第7図）四間・四間の東西棟で総柱形式の堀立柱建物である。柱間は柱穴247~321間で246・248・269・238cm、同321~354間で257・260・237・216cmを各測り、概ね南北方向の梁行で8尺と7尺（北側一間のみ）、東西方向の桁行で8尺等間と捉えられる。掘り方は一定しないが、径30~50cm、深さ30~50cm程の規模をもち、S B 2 に較べれば相対に小振りと言える。建物の主軸方位はN—8°—Wで、S B 1・2 に較べ幾分西に偏る傾向がある。

S B 4 建物跡（第8図）S B 2・3 の南に接する二間・三間の東西棟で東面・南面に廟をもつ礎石建物である。梁行は、柱穴103~93間で272・308cm、同100~90間で236・286cmを各測るが、概ね9尺等間と見てとれる。桁行は柱穴103~100間で270・330・210cmの距離があり、各々9尺・11尺・7尺と判断できる。廟は南面・東面共に3尺の張り出しある。掘り方は径50cm内外の円形で、深さ15~30cmとやや浅く、柱穴89・90他のあり方に典型的な礎石の形状が覗えた。建物の主軸方位はN—90°—Wである。

S B 5 建物跡（第9図）S B 2・3 の前面（西方）に位置する総柱建物跡で、東西三間（四間か）・南北四間の東西棟である。当初三間・四間と捉えて理解したが、東側にさらに一間分延びる可能性が高い（第22図参照）。柱間は柱穴168~183の梁行で150・270・240・150cmを各測り、各々5尺・9尺・8尺・5尺、桁行は柱穴435~189・193間で、180・300・300・270cmと計測できる。6尺・10尺・10尺・9尺の間尺と見てとれよう。なお、北と南辺の5尺、及び西辺の6尺の間尺を持つ一間分は身舎を囲む廟とも見え、東面を除く三面に廟のつく建物跡とも理解できる。掘り方は疊詰めの礎石式（434他）と、角材の柱根を良好にとどめる掘立式（172他）とが混在している。時期的特徴なのか、地形的要因他による

特殊事例なのか特定できないが興味のもたれるところである。建物の主軸方位はN-3°30'-Wであった。

S B 6 建物跡（第10図） S B 5 の西側に隣接する東西二間・南北四間の南北棟で、西辺に廂をもつ。S D19、S K146・431他の遺構と重複し、平安期のS K431他の土壙よりは明らかに新しく、S D19との関係で近いと推測できるが、直接に切り合う部分がないため不明である。S D19溝の覆土中にも僅かながら白磁や珠洲系陶器の小片が認められ、中世前期の所産と考えられる。掘り方は径35cm規模のものが多く、全体に小振りである。また、内部には2・3個の礫（602）、あるいは掘り方いっぽいに大きな礫の詰められたもの（437・429）が散見された。柱間は柱穴382-602間で90・240・240cm、同602-607間で250・227・230・160cmと各調ることができ、梁行は8尺等間で3尺廂、桁行は8尺・8尺・8尺・6尺と窓える。建物の主軸方位はN-10°-Wである。

S B 7 建物跡 S B 8 の東側に位置する二間・二間の倉庫跡と考えられる建物跡である。柱間は8尺等間と考えられ、円形で径40cm規模の柱穴から構成される。掘り方内には2・3個の礫が入れ込まれる状況が認められる。建物の方位はW-1°30'-Sである（第4・22図）。

S B 8 建物跡（第6図） 調査区の北東部に位置し、D-4～E-4グリッドに中心をおく東西4間・南北2間の東西棟で、東面に廂を持つ。他の遺構との重複はない。掘り方は径40cm、深さ30～40cm内外を割り、内部には2・3個の小礫が認められる。梁行は柱穴52・51-262間で362・304cmを各測り、桁行は同52～36間で、260・182・196・202cmと不揃いとなる。廂までは3尺である。全体に柱間の一一定しない特徴が目につくが、概ね梁行10尺・桁行7尺が基本であろう。建物の主軸方位はW-1°-Sであった。なお、建物との関係は不明ながら、廂列上の柱穴32内から珠洲系陶器の壺（T種）破片が出土している（第6図中段）。

S A 9 柱列跡（第8図） B-4グリッド北壁よりに位置し、柱穴410・411・441の三本、あるいはやや離れるS P414から構成される「門柱」かと考えられたものである。前者の走向はN-83°-Wで、建物跡の主軸方位にも大差なく、また、道路側溝と見なされる溝跡S D8～10等にも沿うと窓える。直線上に並ぶS P410～441の柱間は9尺等間である。なお、調査区外の北側についても三本のトレンチを入れて対応する柱穴の有無を確認したが、ついに発見できなかった。掘り方は径60cm内外の円形を呈し、六角に面取りされた柱根基部が何れにも遺存していた。柱根径は約40cmと大形である。距離の離れるS P414は時期的に先行する門柱の一部と考えられる。建物跡同様に建て替え等が行われた結果であろう。

2 土壙

土壤は3基前後の検出数があるが、遺物等のまとまりをもつものは、何れも建物の構築に伴って整地されたC-2グリッド周辺を中心として検出されたものである。ここに示したS K143・145・431は平安期、S K140は中世前期の所産と推測されるものであり、S K431にはあかやき土器・黒色土器を主とする多量の遺物を伴っていた。また、S B 5 に切られるS K143の覆土中から大量の炭化米（図版14）が出土していることを記しておく。

S K143土壙（第12図）

B-2グリッドの北側に位置し、S B 5 に切られる。南北164cm、東西224cmの規模をもち、検出面から深さ約20cmを測る。覆土2・3・5・6層に炭化米を多く含み、一部にその塊や焼土粒等も散見される。出土土器はあかやき土器類が中心で93点程の出土数がある。

S K145土壙（第12図）

B-3グリッド南東端に位置し、中世の小柱穴に切られている。南北98cm、東西74cm、深さ15cm前後の規模を測る。覆土2・3層に多量の土器を包含し（第14図）、炭化粒等の混在も多い。

S K431土壙（第12図）

B-2グリッドの西南に位置し、S B 6 に切られる。南北238cm、東西138cm、深さ18cmの規模をもち、内部に敷き詰められたように多量の遺物を包含していた。基本的に整地層下の遺物群に同等と捉えられる（第15、16図）。

S K140土壙（第12図）

D-3グリッドの南西に位置し、S B 2・3に隣接している。東西81cm、南北73cm、深さ12cmの規模をもち。遺物の出土はない。既に触れたように、生活面に関わると考えられる覆土を最上層に有している（F 1：黒褐色砂質シルト）。

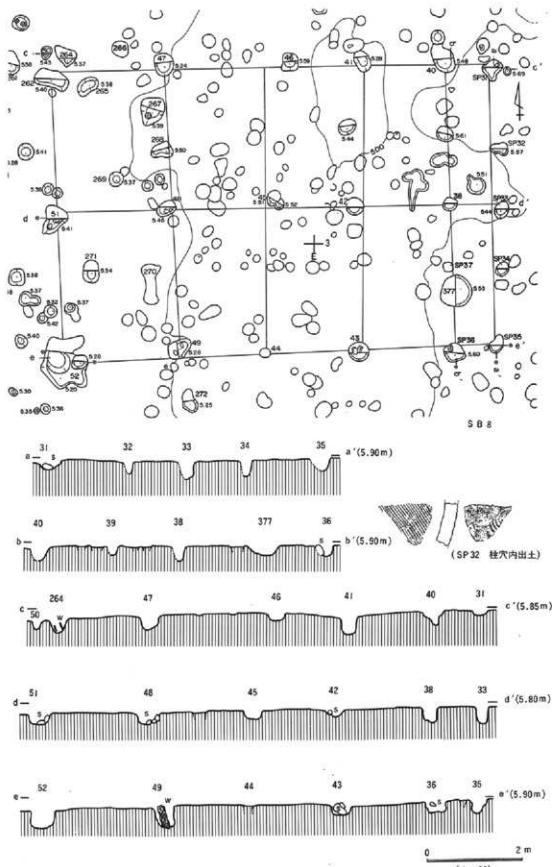
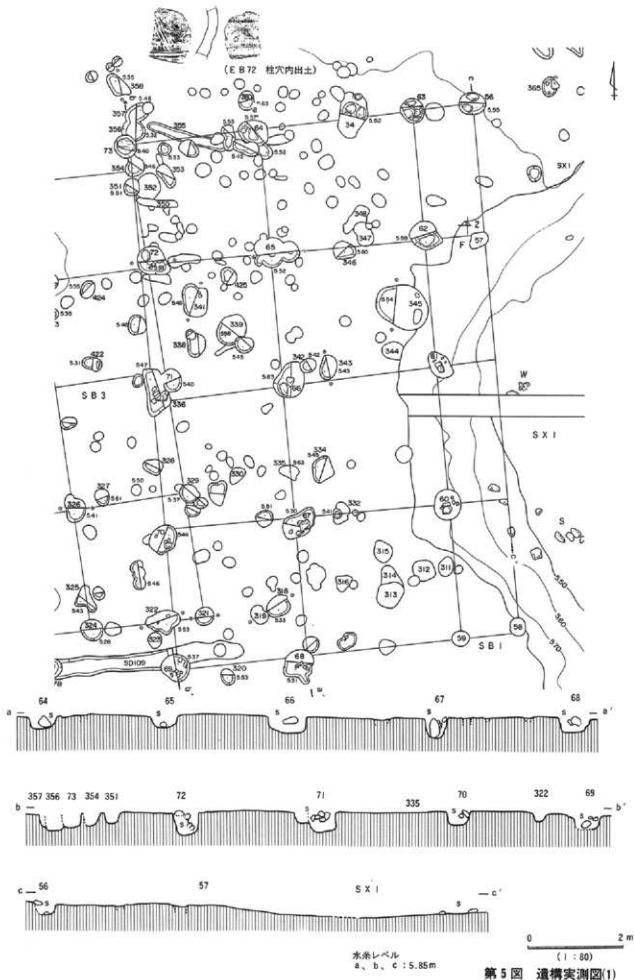
3 溝跡

全体で30条以上の大小溝跡が検出されたが、主要なものを上げれば、S D 5・8・9・10・12-14・19等となるだろう。この内、建物跡の北を走るS D 5・8・9は、幅1.5m内外で並走して東西に延び、門跡と考えられたS A 9の南側を通り過ぎてさらに調査区外へと続く様子と捉えられる。また、これらに直交するS D13・14も、例えば「屋敷内への通路」と推測することも可能であろう。出土遺物は平安期の遺物を除けばごく限られるが、S D 8・13の底面から出土した火鏡臼2点、あるいは東西を区するS D19溝跡から出土した珠洲系陶器の壺や白磁片（未提示）等があり、明らかに建物跡と同等の時期に帰属したと窓える。また、「L」字形に曲がる小規模なS D12・18等の溝跡は、建物域の小区画を意味していると受けとめられる。なお、断面図を第12図の下段に、そのセクションポイントを第4図中に示しているので参照されたい。

4 整地跡

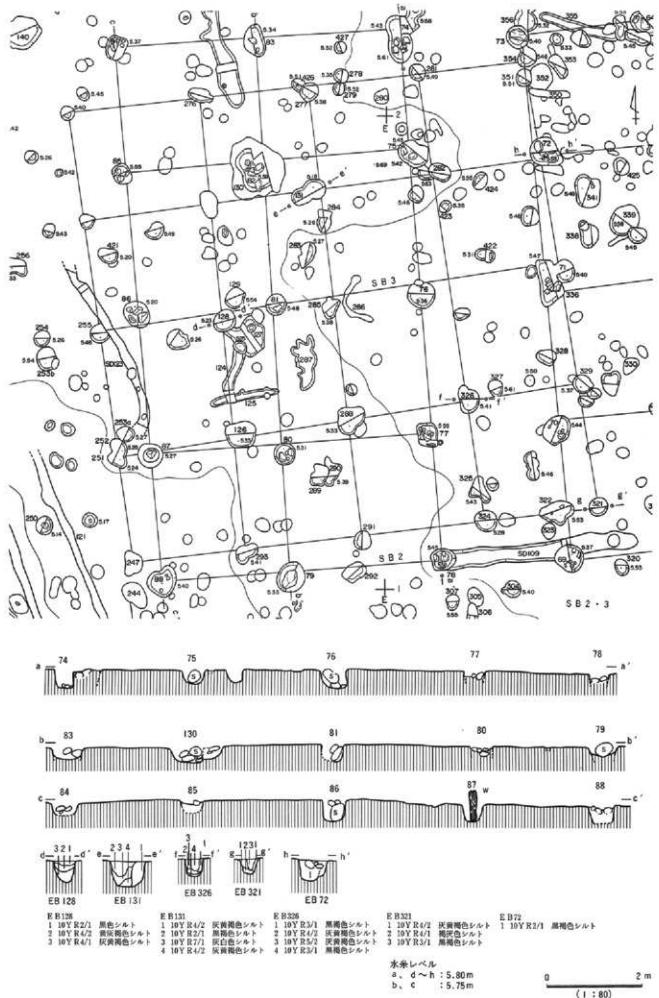
S B 5 建物域とほぼ重複して確認される整地層が認められる。その広がりは東西10m、南北10mの略方形を呈し、当初土層の汚れを捉えて堅土と誤認した経過があった。しかし、ベルトを残して掘り下げた段階で、覆土最上層のあり方が整地によるものと判断された。

すなわち、整地層の灰黃褐色シルト層が建物の東側に向て漸次厚く堆積する状況が認められ、S B 5 とS B 2・3の手前に南北方向で横たわる旧河川起源の低湿地を埋め立てた目的があつたと推測できるのである。断面図（第11図）から明らかなように、東側の整地層下は真っ黒と形容できる湿地性の自然堆積層からなり、地山層も呼応して低下する傾向を見せていた。なお、この整地層下には多くの平安時代遺物が含まれている（第13・14図）。

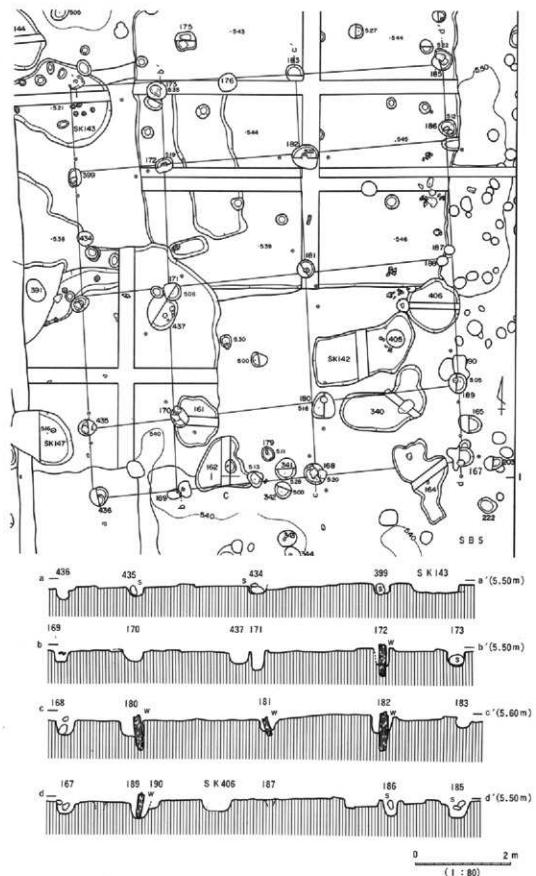


第5図 遺構実測図(1)

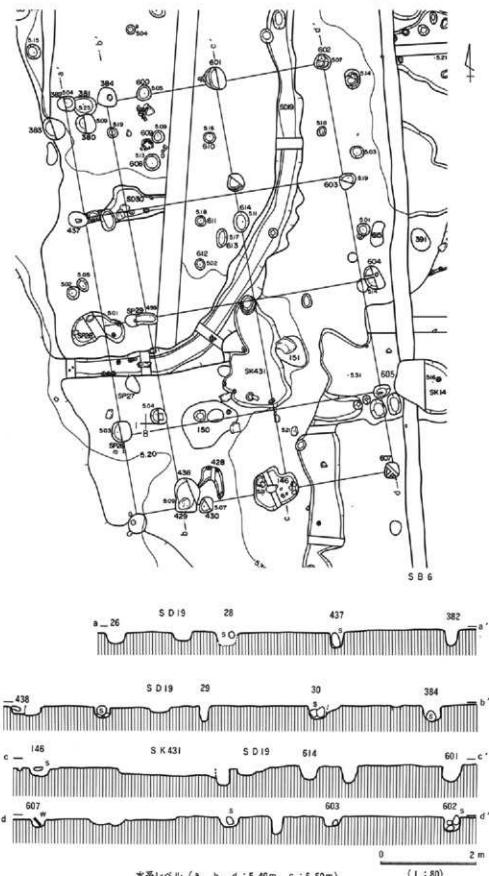
V 檢出邏輯



第7回 遺構実測図(3)

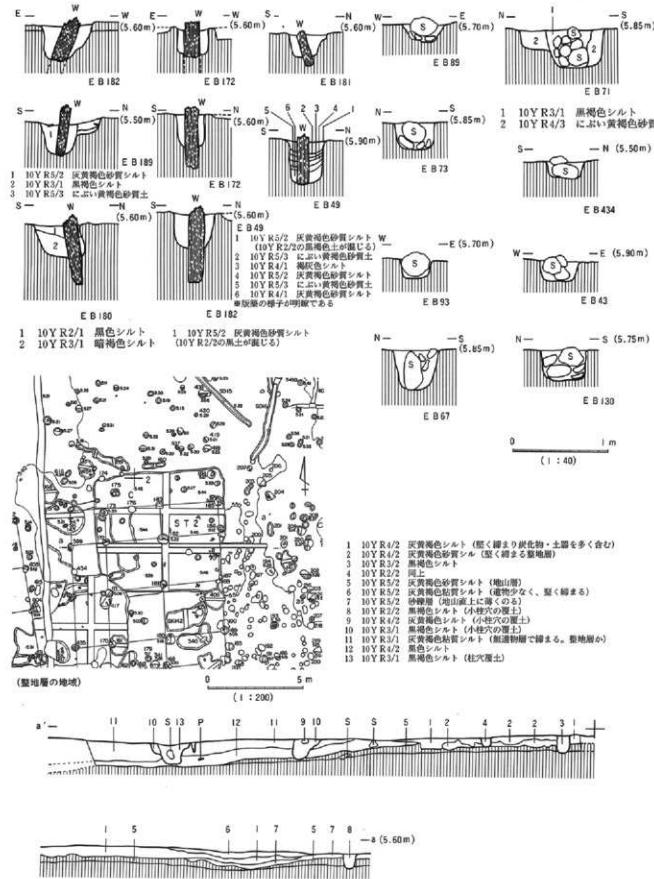


第9図 遺構実測図(5)



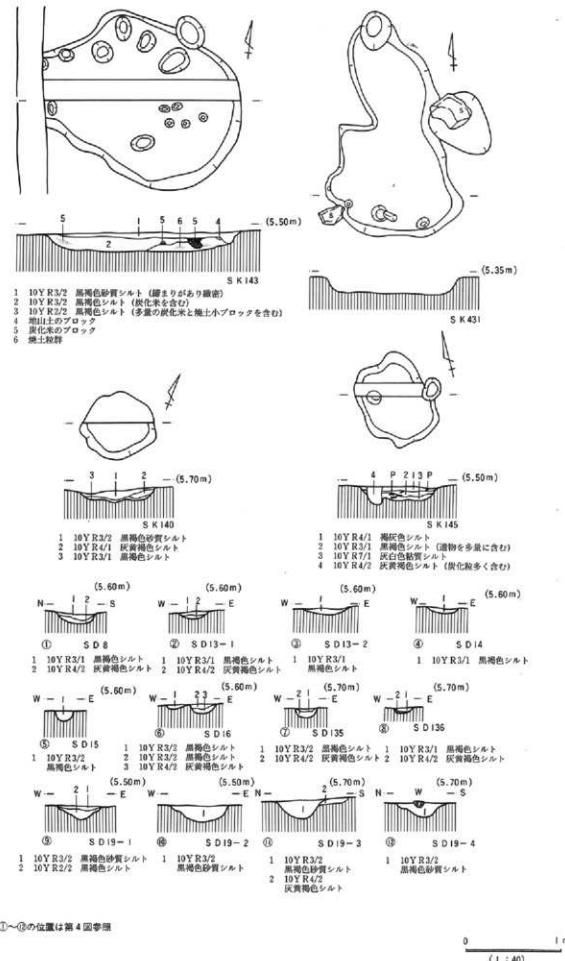
第10図 造構実測図(6)

V 檢出遺構



第11回 遺構密測図(7)

V 檢出遭權



第12回 遺構室測図(8)

VI 出土遺物

調査区内から整理箱にして20箱、総点数約10,500点余の土器類をはじめとして木製品・石製品・金属製品が出土している。時代別にすれば平安時代と鎌倉時代、及び若干の江戸時代以降に係るものとに大別される。以下に時代毎・種別毎の概要を記していく。なお個々については章末の観察表を参照されたい。

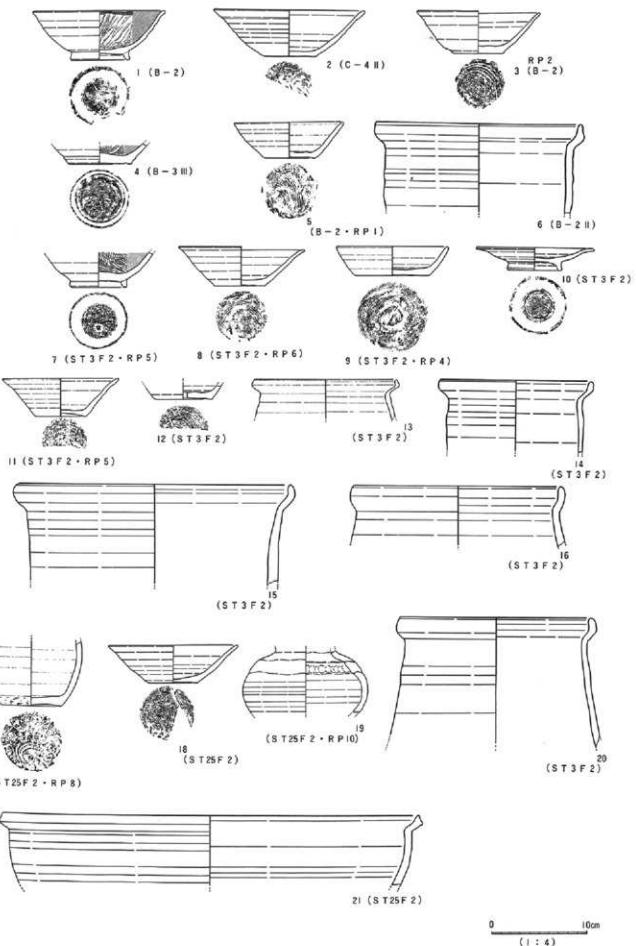
1 古代の土器

平安時代の土器は、あかやき土器・黒色土器・土師器・須恵器、その他コンロ形土器等に区分できる一群で構成される。機能別では、供膳具にあかやき土器と黒色土器（内黒・両黒）、煮炊具にあかやき土器・土師器、貯蔵具に須恵器の壺・甕類が主体となり、はじてあかやき土器の量的卓越に大きな特徴が認められた。一方、量的・器種的まとまりを見せるSK431等では供膳具における黒色土器の占める割合が高いこと、須恵器の絶対量が著しく少ないことが注目される。SK145でも同様な傾向と判断できたが、器種的に煮炊具に偏るため、供膳具での状況が明らかでない感がある。しかし、羽釜風の形鉢（第14図9・10）や、大形で台の付く内黒板（第14図13）等に特徴が窺え、さらに甕類の口縁部形態等も含めた特徴から年代考定の手がかりが得られると推測された。また、整地層下のST3-25として取り上げた一群の主体は、上に述べたSK431例とは明らかに形態上の差異があると指摘でき、底部の切り離しが回転窓切りで、しかも箱型の古い形状を呈する环（第13図9、第14図1～3）、あるいは有台皿（第13図10）の存在、そしてあかやき土器甕・鍋類での颈部から口唇部にかけての造作手法（第13図13・21、第14図4）等で頗るな違いを見ており、時期的にSK431の一群よりは遅ると考えられる。

その他では、若干量ながら目につく非クロコ土師器（第16図18）と、厨房に係りがあり、かつ地域的展開を強く示すと考えられるコンロ形（あるいは支脚形）土器（第15図14）等も本遺跡出土土器の中では気がかりなところである。以下に器種・量共にまとまりを見せる造作単位での土器群について略記しよう。

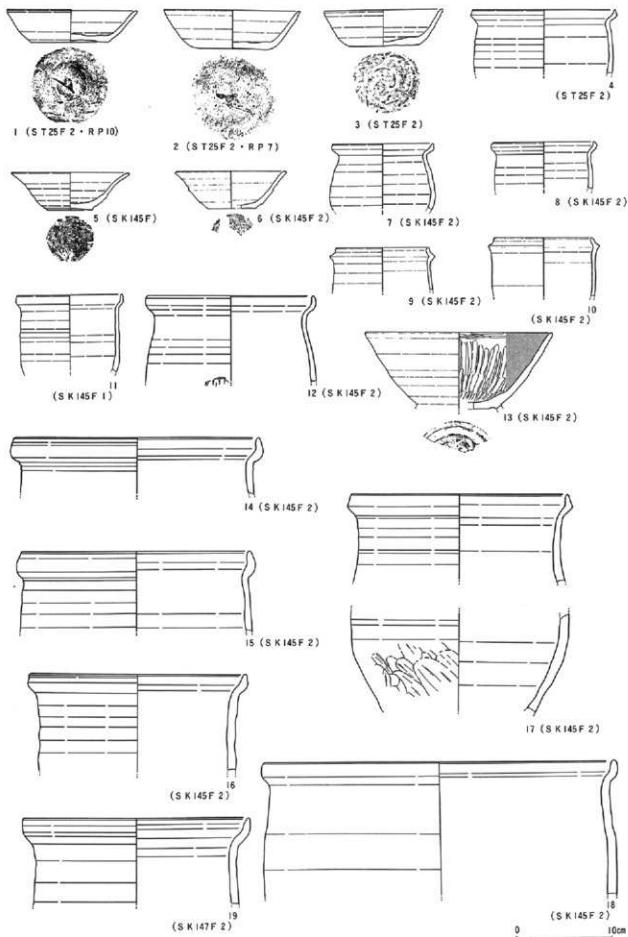
（ST3-25の土器組成）（第13図・14図）

整地層下の土器群である。あかやき土器の壺・皿・甕、黒色土器の有台環等が出土している。あかやき土器の壺は、口縁が大きく開き端部が外反気味となってやや歪みを持つこと、器央部の三ないし四条にわたるロクロ成形痕がめだった凹凸となって残されるなどの特徴がある（第13図8・11）。また、先に述べた底部窓切りの环は（第13図9）、「回転窓切り無調整」とする定義からしてあかやき土器とは言えず、須恵器とすべきものである。しかし酸化焰焼成であること、胎質的に余切りのそれとは異なること、地域的なものと見ててもなお余切りの一群に伴うとは考え難い技術・形態的特徴であるなどの諸點が論議の元となるだろう。本遺跡例は整地層下での共伴とは言えるが、その以前の関係が明確でなく、必ずしも同時期とは即断できるものではない。なお、この手の环は距離的に近い吹浦遺跡の第1・2次調査で指摘されたことがあり、「9世紀中葉を下限とする前半代」に位置づけられて理解された土器群中に含まれていた（浜谷1985他）。ST25として取り上げた土器群もST3同様に理解できるが、ST3に見られた混在的状況がより少なく、古相を示す



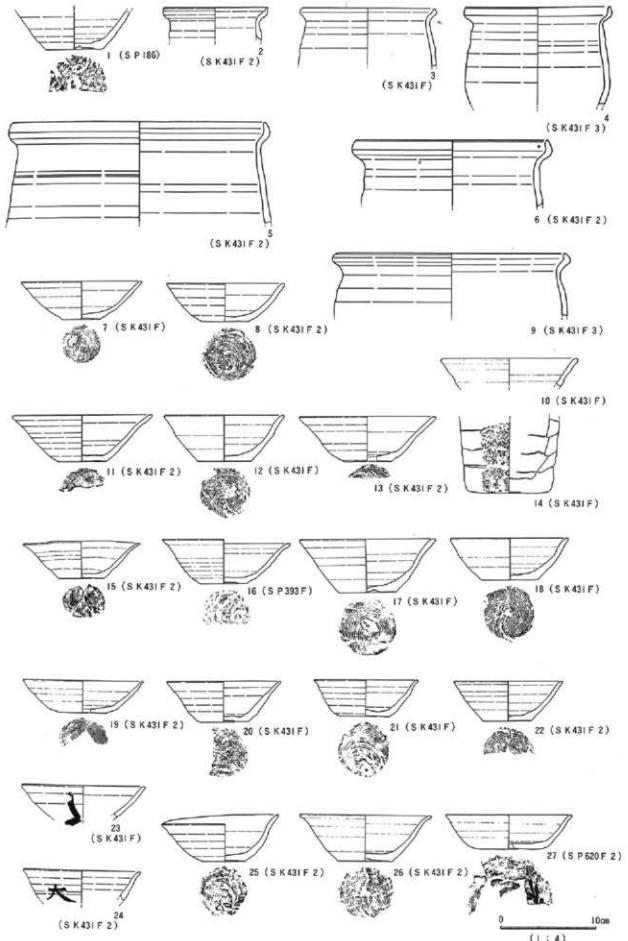
第13図 遺物実測図(1)

VI 出土遺物

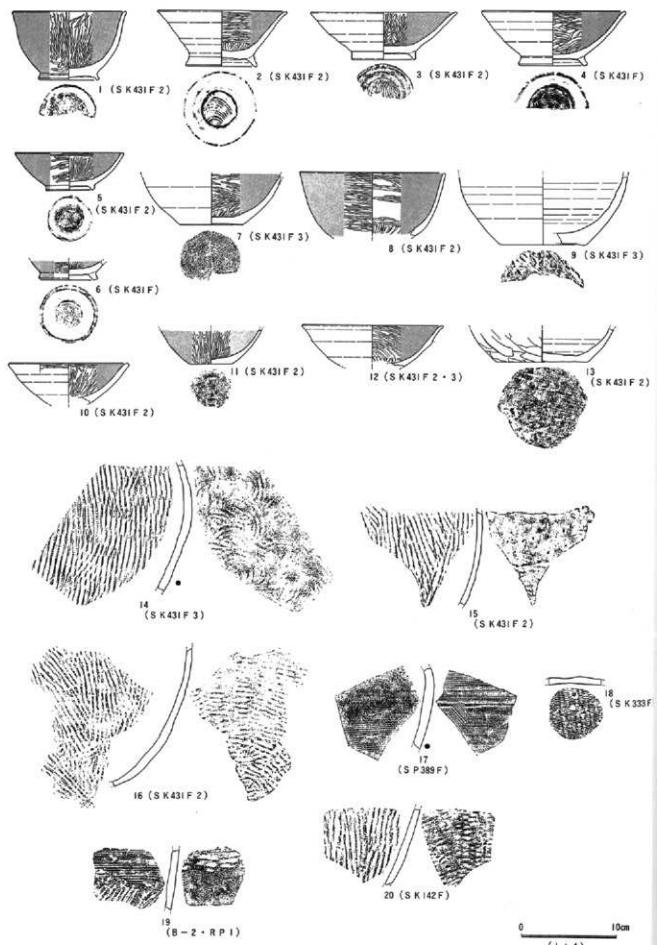


第14図 遺物実測図(2)

VI 出土遺物



第15図 遺物実測図(3)



●は須恵器を表す。

第16図 遺物実測図(4)

一括性がある程度保たれているとみなせそうである。すなわち、あかやき土器鍋・甕に見る頸部から口唇部の定角的な作りや(第13図21)、体部下半の回転窓ケズリ調整(第13図17)等の特徴は以下に述べるSK145での特徴とは明らかに異なり、時期的に先行する様相であることが理解されるからである。したがって、窓切りで法量的にやや大きい甕(第14図1~3)をも含めたST25の組成は9世紀中葉を下限とする年代の中に位置づけても大過ないと思われた。

(SK145・431の土器組成)(第14~16図)

SK145の土器群はあかやき土器の甕・甕(大・中・小)、黒色土器有台椀から構成され、甕類の特徴はST3でも触れた口縁の大きく聞く器形で盃みがあること、クロ底を明瞭に止めること、回転式切りで無調整等に求められる(第14図5・6)。一方、大形の甕類は「く」の字形に立ち上がる口縁部の造作が、全体に厚くて丸味を持つ特徴が顕著であり、より新しい段階の一群であると観えた。体部の破片類には外面に平行タキガ、内面は平行アテが後にヘラナデによって擦り消されたものが存在する。また、タキガ調整の施されない第14図17は、下半から底部にかけて粗い斜め方向のヘラケズリが認められ、内面はクロの形成痕のみとなる。同時期ではないが下長崎遺跡V期に特徴的な小型鉢の調整を想起させる資料である。

黒色土器は口径20cm近い大形のもので、内面に縦方向のミガキを充填して内黒としている。高台を持つが剥落して原形を止めない。一方、SK431出土器は量・器種共にまとまりがあり、かつ出土状況から見ても一括性の強い土器群と認識できたものである。あかやき土器甕・甕(大・中・小)、黒色土器有台・無台椀(内黒・両黒)、コロン形土器、須恵器大甕(破片)等で構成される。供膳における種別の割合は既に記した通りであり、黒色土器A・B(田中1967)の量的まとまりが注目された。あかやき土器甕の特徴は「幾分重みがある。量感ある厚手の作り」(第15図12・17・18他)。器高が全体にやや高め。法量的大小(第15図17・21等)が識別される。須恵器ともあかやきとも言えない器のヘラ切り離し甕(第15図27)を伴う。また、体部外面に墨書きが見られる(第15図23・24)。一つの特徴と言えるだろう。あかやき土器甕の口縁部の作りでSK145例に近いもの(第15図4~6)も見られるが、比較的ST25例に近い形姿(第15図2・3)が窺われ、いわば中間的様相とも受け取れなくもない。なお、下半部の破片類からは内面の平行アテを止めるもの(第16図14~16)が大方と判断され、意図的に擦り削しを行う例は鍋類の内面を除けばごく希と観察された。積極的には言えないながらSK145との相違点の一つに上げられるのではないかと見ている。黒色土器は内黒と両黒の二種があり、内黒では有台で口径15cm内外の(第16図2・4・4・12)と幾分小振り(第16図10)、及び無台で体部の張りが強い(第16図7)の三種があり、前二者が主で後者が少ないと観える。また、内面のヘラミガキは体部に横方向や斜め方向(2・4・7・12)、あるいは縦方向(第16図10)に施すものがあつて一定ではない。両黒は有台(第16図1・5・6・8?)と無台(第16図11)の二種、大形(第16図1・8)と小形(第16図5・6・11)の別、口縁が内湾して立ち上がる身の深い形態(第16図1・8・11?)と、丸く半球形の形態(第16図5・6?)の二種が識別され各々特徴となる。内外面のミガキが縦方向主体の第16図1・11と横方向

が主となる同図8、外面横・内面放射状で施す第16図5・6があり、内黒に比べて何れもその仕様は丁寧と認められる。

2 中世の土器

遺構を覆う包含層、あるいは柱穴の掘り方内など遺構から、603点余の古代末から中世に係る陶器類が出土している。破片の集計から、珠洲系陶器568点、越前焼系2点、白磁24点、青磁9点等が数えられ、白磁や内面のアテ具に青海波文の見られる珠洲系陶器等が注目された。以下に種別・器種毎の概要を述べていく。

(珠洲系陶器) (第17-18図) は器種的に壺T種(吉岡1982)を主体として、壺R種、加筋叩打を持った裏、及び片口鋲なしの擂鉢の類が認められた。

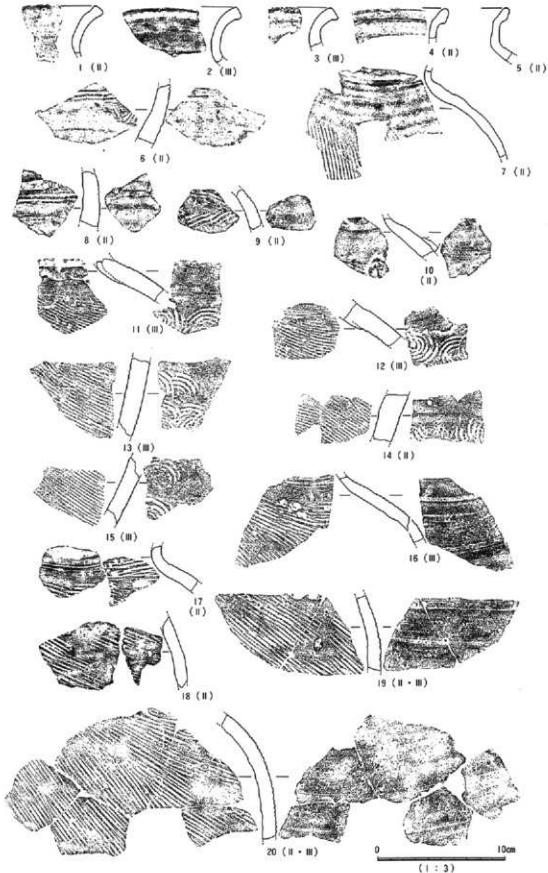
壺は復元不能のため形状不明ながら二次的加熱を受けたと考えられる一個体(細片450点以上)がある。器高15~18mm内外と厚く、大形の製品であったことが推測されるが、口縁部や底部形状は不明である。内面に浅い小判形のアテ、外面に幅1.0~1.5mmほどで施される右下がりの平行タキ調整が特徴となる。タクギの仕様は第18図16~19に示す如くで、重層する菱形文様に打ち込まれる装飾的構成が、連続的に配置されたものと観える。

壺T種は4個体程度確認でき、口縁部資料では頸部外反で、頸部が逆「く」の字状となる第17図1~3、直上する頸部から先端が外傾して聞く幅の狭い帯状の肥厚した口唇部となる第17図3~5の二種が識別される。何れも肩の裏面が強いやや小形の形態と考えられる(第17図2と17同一個体、第17図4・5・7と7同一個体)。一方、内面に青海波のアテ痕を残す第17図11~15・第18図12~15に示す個体は、いくぶん器壁が厚目となっており前記のものより大形の製品と推測できる。なお、第18図10青海波のアテ痕を内面端部に僅かながら止めていると判別できることから同一個体の底部資料と判断される。しかし、切り離し痕不明で、ナデや細い平行沈線の若干条を知るだけである。焼成は第17図1~3、11~20が軟質、図4・5・7は緻密・硬質で、内外共に光沢を見せるほか、頸~肩部にかけて一面に多くの灰を付着させる。

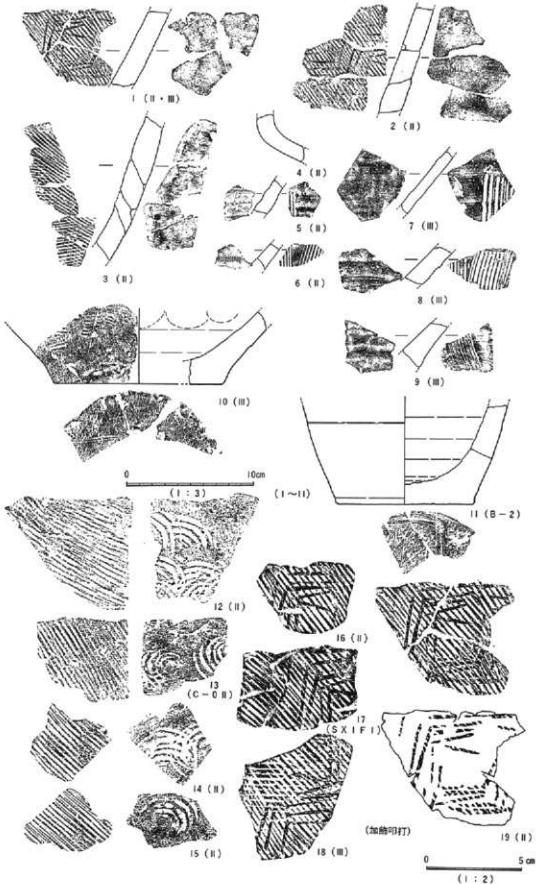
壺R種は一個体に限られ(第17図8~10)、硬く緻密な焼成と無文地、三条の波状沈線、横位に貼り付けられる耳状取っ手(第17図10)等に特徴を持つ。また、第18図11は同一個体の下半~底部資料(第18図11)と胎土・色調他から判断でき、急傾で立ち上がる器形・ロクロ成・整形・厚手造り等の一端を知らせててくれる。底面は第18図10同様に切り離し不^明で二次的ナデ整形と平行沈線様の圧痕?が認められただけである。

擂鉢(第18図5~9)は小さな破片ながら4個体分が識別された。鉢の形状は各々異なっており、目が粗く間隔の空く(5・7)、密に施される八条一単位と見られる(8)、刷毛目状とも見るる細線の(9)、端正な(4)等がある。焼成は全体に軟質ながら、胎土的に砂粒の多い(5・7~8)と、均一で混入物の殆どない(9)が区別できる。

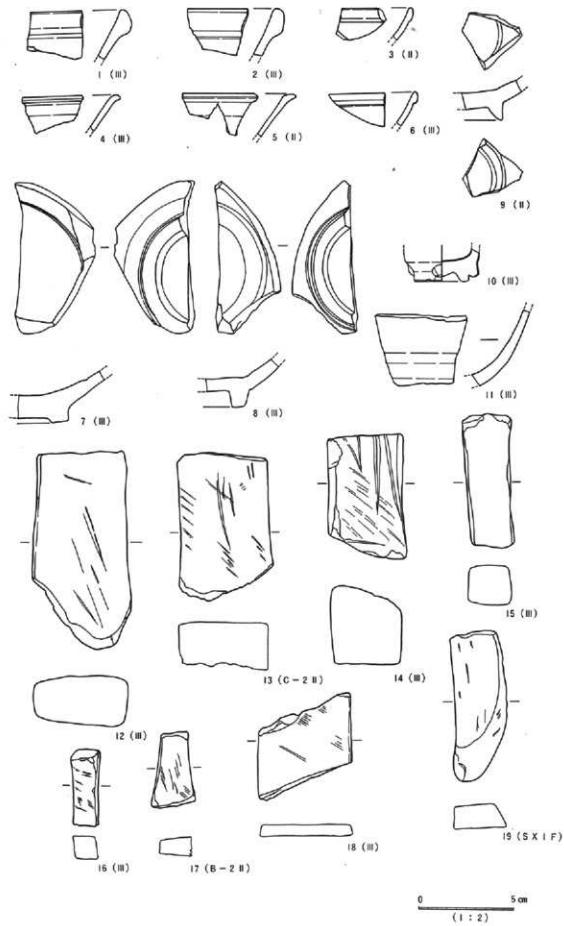
(白磁・青磁) (第19図1~11)は共に各9個体ほどが認められた。青磁は香炉・椀類等(10・11)を認めたが資料の大半は細片である。白磁は口縁部の形態が玉縁のものと折れ口状(VII類)となる二種があり、前者は玉縁の幅や形状からさらに二種(II・IV類:横田・森田1978)に細分される。底部では高台の削り出しが深く、見込みの釉を輪状に掻き取る(8)、同浅く見込みに一条の沈線が入る(7)、外面直に内面を斜めに削る(9)の他、



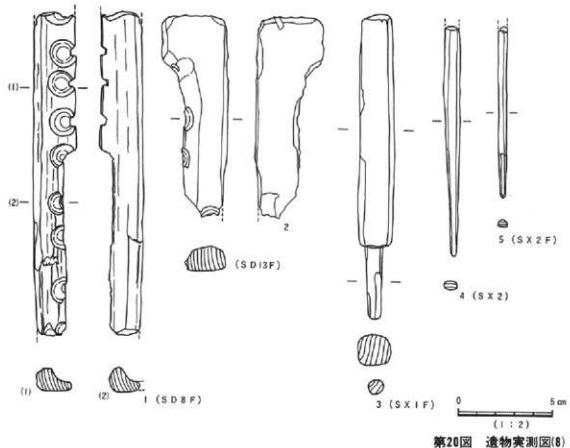
第17図 遺物実測図(5)



第18図 遺物実測図(6)



第19図 遺物実測図(7)



第20図 遺物測定図(6)

未提示ながら無台の小形皿一固体（V類）が存在する。年代とすれば太宰府出土の輸入陶器の編年Ⅱ期、山本1988に対比させればC期（11世紀後半～12世紀前半）段階のものと考えられる。

3. 木製品（第20図）

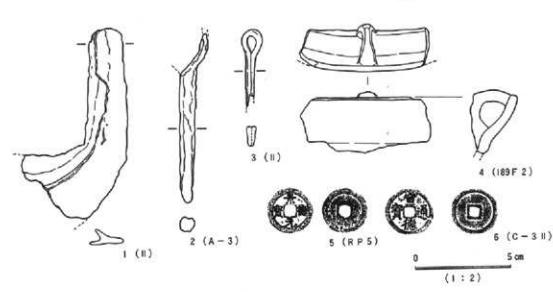
火鑽臼の第20図1は材に杉を使用した全体に保存状態の良いものである。上・下端や側縁の一部を欠くが、右側より一例で並ぶ火鑽孔9個と、対にする火種を落とす「口」の字形の突みが明瞭に見える。第20図2の状態は腐食のため良くなないが、樹脂様に硬化して炭化した4箇所の火鑽孔が認められた。また、第20図3は使途不明ながら落り出しによる捕入部を備えた部分品と考えられる。箸（第20図4・5）は4・5面に削りを入れて断面梢円形に成形し、さらに先端をやや尖頭としている。用材は杉と考えられる。

4. 土・石製品（第19図12～19）

図示したものの他13点程の砥石が出土している。大方は緻密で軟らかい石材を用いるが、若干例ながら硬質の石材例（第19図15）も認められた。使用痕は大半が刃面の研磨によると判断できるが、一部に鋭い刃物の先端を強く磨いたことによると判断できる深い凹線上の痕跡を止めるもの（第19図14）が認められる。

5. 金属製品（第21図）

検出された金属製品の主要なものは図示したもののが大半である。歎先の半欠品や内耳の鉄鍔、あるいは釘や金具の類である。歎先は木質部を挟み込む構造を持つ他、刃先に向けて幅広になる形態等が観察された。鉄鍔は内耳の取り付く辺りで緩い段を見る深身の形態が推測できる標品である。遺存状態が極めて良く、砂鐵を素材とした詩物製品と考えられる。その他、景德元宝、宣德通寶などの渡来銭や釣穴状の頭部を有す釘・金具類が認められた。



第21図 遺物測定図(9)

遺物測定表(1)

博 号	遺 物 番 号	種 別	器 種	計 測 値 (mm)		底部切溝	調 整 法	出 土 地 点	備 考	
				内 面	外 面					
第13回	1	黒 色 土 盤	高台付环	141	63	53	3 回転系切	ミガタ	ロクロ	B-2 内黒
	2	あかやき土 盤	环	160	55	50	3 回転系切	ミガタ	ロクロ	C-3II
	3	あかやき土 盤	环	131.5	54	46	4 回転系切	ミガタ	ロクロ	B-2
	4	黒 色 土 盤	高台付环	66	4.5	4.5	回転系切	ミガタ	ロクロ	B-3III
	5	あかやき土 盤	環	116	53	38	回転系切	ロクロ	ロクロ	B-2
	6	黒 色 土 盤	環	216	93	94	8	ロクロ	ロクロ	B-2II
	7	黒 色 土 盤	高台付环	53	35	35	5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2(R P2) 内黒
	8	黒 色 土 盤	环	134	55	42	5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2(R P6)
	9	黒 色 土 盤	高台付环	118	53	31	8 ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	S T25F2(R P4)
	10	黒 色 土 盤	环	122	52	46	7 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T3F2
	11	黒 色 土 盤	环	60	35	35	回転系切	ロクロ	ロクロ	S T3F2(R P5)
	12	黒 色 土 盤	环	154	51	46	5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T3F2
	13	黒 色 土 盤	环	160	6	6	ロクロ	ロクロ	S T3F2	
	14	あかやき土 盤	環	288	10	10	ロクロ	ロクロ	S T3F2	
	15	黒 色 土 盤	環	222	8	8	ロクロ	ロクロ	S T3F2	
	16	黒 色 土 盤	环	64	69	6.5	回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2(R P8)
	17	黒 色 土 盤	环	138	54	46	5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2(R P10)
	18	黒 色 土 盤	环	126	73	38	4.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2
	19	黒 色 土 盤	环	112	8	8	ロクロ	ロクロ	S T3F2	
	20	黒 色 土 盤	环	200	6	6	ロクロ	ロクロ	S T3F2	
	21	黒 色 土 盤	环	437	9	9	ロクロ	ロクロ	S T25F2	
第14回	1	あかやき土 盤	环	138	88	34.5	4 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2(R P10)
	2	あかやき土 盤	环	126	59	34	5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K14F2
	3	あかやき土 盤	环	126	73	38	4.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S T25F2
	4	あかやき土 盤	環	152	6	6	ロクロ	ロクロ	S T25F2	
	5	あかやき土 盤	环	126	48	46	6.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K14F5
	6	あかやき土 盤	环	117	50	36	6.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K14F5
	7	あかやき土 盤	环	106	5	5	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	8	あかやき土 盤	環	96	7	7	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	9	あかやき土 盤	环	105	4	4	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	10	あかやき土 盤	环	112	8	8	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	11	あかやき土 盤	环	174	3	3	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	12	あかやき土 盤	环	103	8	8	ミガタ	ロクロ	ロクロ	S K14F5
	13	黒 色 土 盤	高台付环	103	8	8	ミガタ	ロクロ	ロクロ	S K14F5 内黒
第15回	14	あかやき土 盤	环	258	8	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	S K14F5
	15	あかやき土 盤	环	240	16	16	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	16	あかやき土 盘	环	230	9	9	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	17	あかやき土 盘	环	228	10	10	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	18	あかやき土 盘	环	365	9	9	ロクロフタ	ロクロフタ	S K14F5	
	19	あかやき土 盘	环	236	8.5	8.5	ロクロ	ロクロ	S K14F5	
	20	あかやき土 盘	环	62	39	7	回転系切	ロクロ	ロクロ	S T18F6
	21	あかやき土 盘	环	110	4	4	ロクロ	ロクロ	S K43F	
	22	あかやき土 盘	环	144	4	4	ロクロ	ロクロ	S K43F	
	23	あかやき土 盘	环	266	6	6	ロクロ	ロクロ	S K43F	
	24	あかやき土 盘	环	229	6	6	ロクロ	ロクロ	S K43F	
第16回	25	あかやき土 盘	环	129	40	40	4 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	26	あかやき土 盘	环	121	50	40	4.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	27	あかやき土 盘	环	144	5	5	ロクロ	ロクロ	S K43F	
	28	あかやき土 盘	环	128	32	49	5.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	29	あかやき土 盘	环	114	32	49	5.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	30	あかやき土 盘	环	121	32	49	5.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	31	あかやき土 盘	环	144	5	5	ロクロ	ロクロ	S K43F	
	32	あかやき土 盘	环	128	32	49	5.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	33	あかやき土 盘	环	114	32	49	5.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	34	あかやき土 盘	环	121	32	49	5.5 回転系切	ロクロ	ロクロ	S K43F
	35	あかやき土 盘	环	144	5	5	ロクロ	ロクロ	S K43F	

讀物觀察表(2)

番号	通称	種別	器種	計測 値		底面距離	調査方法			出土地点	備考
				後日	最高		測定	内面	外面		
第15回	12	あかやき土器	壺	127	56	48.5	5	断面切引	クロコ	S K431F	
	13			144	50	47.5	5.5	断面切引	クロコ	S K431F	
	14	コンノボ土器		90		11		断面切引	クロコ	S K431F	輪摺
	15			124	55	49	5	断面切引	クロコ	S K431F	
	16			136	50	47	4.5	断面切引	クロコ	S P363F	
	17			144	60	56	4	断面切引	クロコ	S K431F	
	18			125	60	44.5	6	断面切引	クロコ	S K431F	
	19			128	45	34	4	断面切引	クロコ	S K431F	
	20	あかやき土器	壺	120	56	45.5	5.5	断面切引	クロコ	S K431F	
	21			110	58	43	4.5	断面切引	クロコ	S K431F	
	22			115	26	42		断面切引	クロコ	S K431F	
	23			131		4		断面切引	クロコ	S K431F	輪摺
	24			125		4.5		断面切引	クロコ	S K431F	輪摺(大)
	25			125	50	50	6.5	断面切引	クロコ	S K431F	
	26			140	60	49.5	4	断面切引	クロコ	S K431F	
	27			135	60	45.5	4	断面切引	クロコ	S K431F	
	28			121	73	54	5.5	断面切引	ミガキ	S K431F	黒塗(1)
	29			138	74	58.5	4	断面切引	ミガキ	S K431F	内面
第16回	3	黒色土器	高台付杯	155	66	50	4	断面切引	ミガキ	S K431F	内面
	4			152	73	57.5	4	断面切引	ミガキ	S K431F	内面
	5			115	50	41	8.5	断面切引	ミガキ	S K431F	内面
	6			66		6.5	4	断面切引	ミガキ	S K431F	内面
	7		壺	63		6.5	4	断面切引	ミガキ	S K431F	内面
	8			154		4		ミガキ	ミガキ	S K431F	内面
	9		あかやき土器	壺	90	16.5	10.5	断面切引	クロコ	S K431F	
	10			128		5.5		ミガキ	クロコ	S K431F	
	11		黒色土器	壺	225	3	2		カキメータ	カキメタケスリ	黒塗
	12			130	44.5	4	1	ミガキ	クロコ	S K431F	内面
	13		あかやき土器		98	7.5	7.5	断面切引	ロウ	ヘラズリ	S K431F
	14		須						青背景	平行手打	S K431F
	15		あかやき土器	壺					平行手打	平行手打	S K431F
	16								平行手打	平行手打	S K431F
	17	須	壺						カキメータ	カキメタ	S K332F
	18	土器	縦跡						平行手打	平行手打	S K332F
	19	あかやき土器	壺						カキメータ	カキメタ	B-3(2P1)
	20								平行手打	平行手打	S K42F

遺物觀察表(3)

回 号		圖面番号	地物名	地物種別	標記番号	測量方法・物記配	内面	外面	画出地点	回 号	圖面番号	地物種別	測量方法・特記配	内面	外面	画出地点	
第1回	1		ロクロ	ロクロ		高含層Ⅰ				16		円形テラ	高含層タキ	包含層Ⅲ			
	2		ロクロ	ロクロ		高含層Ⅱ				珠		円形テラ	高含層タキ	S X1 F			
	3		ロクロ	ロクロ		高含層Ⅲ				17		円形テラ	高含層タキ	包含層Ⅲ			
	4		ロクロ	ロクロ		高含層Ⅳ				系		円形テラ	高含層タキ	包含層Ⅲ			
	5		ロクロ	ロクロ		高含層Ⅴ				18		円形テラ	高含層タキ	包含層Ⅲ			
	6		ロクロ	ロクロ		波状紋Ⅰ				1		ロクロ	高含層Ⅰ	包含層Ⅲ			
	7		円形テラ	系続タキタク		高含層Ⅱ				2		ロクロ	高含層Ⅱ	包含層Ⅲ			
	8		円形テラ	系続タキタク		高含層Ⅲ				3		ロクロ	高含層Ⅲ	包含層Ⅲ			
	9		ロクロ	波状紋Ⅱ		高含層Ⅳ				4		ロクロ	高含層Ⅳ	包含層Ⅲ			
	10		ロクロ	取手		高含層Ⅴ				5		ロクロ	高含層Ⅴ	包含層Ⅲ			
	11		黄青泥	系続タキタク		高含層Ⅵ				6		ロクロ	高含層Ⅵ	包含層Ⅲ			
	12		黄青泥	系続タキタク		高含層Ⅶ				7		ロクロ	高含層Ⅶ	包含層Ⅲ			
	13		黄青泥	系続タキタク		高含層Ⅷ				8		ロクロ	高含層Ⅷ	包含層Ⅲ			
	14		黄青泥	系続タキタク		高含層Ⅸ				9		ロクロ	高含層Ⅸ	包含層Ⅲ			
	15		黄青泥	系続タキタク		高含層Ⅹ				10		青泥	少少タキタク	包含層Ⅲ			
	16		ロクロ	波状紋Ⅲ		高含層Ⅺ				11		ロクロ	高含層Ⅺ	包含層Ⅲ			
	17		ロクロ	波状紋Ⅳ		高含層Ⅻ				12				104		48	高含層Ⅻ
	18		ロクロ	波状紋Ⅴ		高含層Ⅼ				13				55		48	高含層Ⅼ
	19		ロクロ	波状紋Ⅵ		高含層Ⅽ				14				66		37	高含層Ⅽ
	20		ロクロ	波状紋Ⅶ		高含層Ⅾ				15				23		23	高含層Ⅾ
第2回	1		円形テラ	各段タキタク		高含層Ⅰ				16		製品		40		12	高含層Ⅰ
	2		円形テラ	各段タキタク		高含層Ⅱ				17				39		17	B-2
	3		円形テラ	各段タキタク		高含層Ⅲ				18				55		49	高含層Ⅲ
	4		圓印	ロクロ		高含層Ⅳ				19				79		27	S X1 F
	5		圓印	ロクロ		高含層Ⅴ				1		木	大空	170		22	S D8 F
	6		圓印	ロクロ		高含層Ⅵ				2		木	大空	165		35	D S13 F
	7		圓印	ロクロ		高含層Ⅶ				3		木	水附	81		18	S X1 F
	8		圓印	ロクロ		高含層Ⅷ				4		土	水附	52		23	S X1 F
	9		圓印	ロクロ		高含層Ⅸ				5		土	水附	80		41	S X2 F
	10		圓印	ロクロ		高含層Ⅹ				6		金	先	165		右	包含層Ⅲ
	11		圓印	ロクロ		高含層Ⅺ				7		金	金	50		7	5.1-A
	12		青泥	ロクロ		B-3				8		金	金	41		10	包含層Ⅲ
	13		青泥	ロクロ		C-1				9		5 質品	内面	165		18	S X1 F
	14		青泥	ロクロ		各段タキタク				10		5 質品	内面	165		22	内面實質
	15		青泥	ロクロ		各段タキタク				11		云鐵	古鉄	5		2	内面實質
	16		青泥	ロクロ		各段タキタク				12		古銅	古銅	6		4	長元寶
	17		青泥	ロクロ		各段タキタク				13		金	金	3		3	C-III

VII まとめ

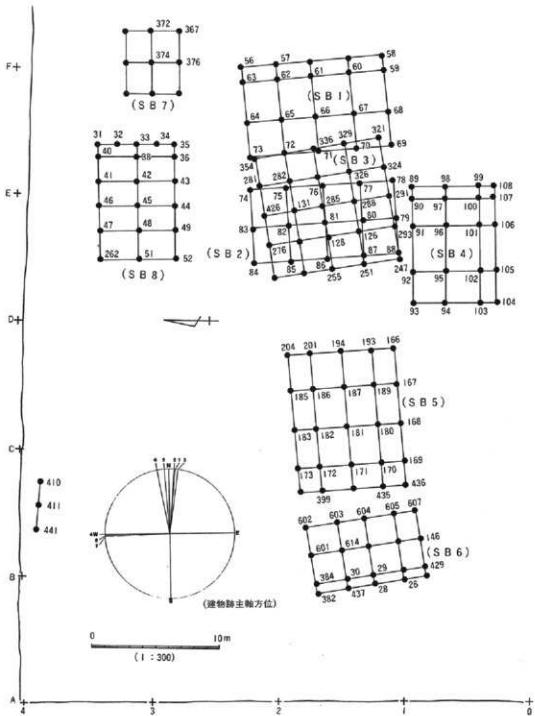
本遺跡の調査は県営は場整備事業「洗沢川地区」に伴う緊急発掘調査である。保存協議等の経過を踏まえて実施された2,000平方mの限られた調査区内から、これまで記した多くの構造・遺物が検出され、その時代的主体は古代末から中世前期に係る12世中葉から後葉代と捉えられた。また、中世前期に帰属する掘立柱建物等の構築に当たっては10世中葉を上限と捉えられる平安時代の構築面を盛土・盛土していることが判明している。従って、その間の約200年近い年月は生活感として途絶えていたと推測される。あるいは周辺の別地点では継続していたかもしれないが、やはり11世紀代を中心とする空白は本遺跡のみならず、地域的・一般的な傾向として認められる現象と理解されるのである。しかし、ここには現在のところ11世紀初頭代を上限として下ることのできない庄内平野の平安時代土器研究の段階とその百年観の視点等問題が少なからず介在すると考えられ、資料的欠落を補って新たな研究の展開が待たれるところである。

一方、本遺跡で企画性を見せる建物跡等が示す性格は、これらの出現時期、あるいは規模や配置等の觀点を基にして見るとき、吉岡氏によって試みられた「中世村落の類型的整理」に照応すれば、珠洲Ⅰ・Ⅱ期に突然として出現する「新開型村落」あるいは「再開発型村落」(吉岡1994)と位置づけて評価される内容にかなりの部分が合致すると推察された。例えば、「(1)一定期間を限って營まれたこと、(ロ)中小河川の扇端低湿地を基盤とし、微高地に營まれた低地村落、(b) 大・中形の屋と小形の倉を保有する上層百姓(田畠ないし名主層)」等々に類似していると判断できるからである。

そこで、本遺跡での中世陶磁器類の在り方はどうかと検討すると、破片数の集計からは、珠洲系96%、白磁2.4%、青磁1.3%、越前系0.3%の数値が得られ、珠洲系の卓越、白磁類の組成等に特徴が現えた。但し、固体数として把握すれば、珠洲系大壺1・壺T種4・同R種1・壺鉢4の計10個体、白磁の椀・皿9個体、青磁9個体、土師器系ないしかわらけ類の皆無と識別される。全体的には少量でかつ限局的な個体数、かわらけ類の不在、中国陶磁器中の四耳壺・水注・合子類の欠落と言った特色が指摘できる。このことも駒主層の所持品とは異なる開発領主層での特質（吉岡1994）を傍証すると捉えることができそうである。なお、遺物群の中では、珠洲系陶器の青海波のテラ寅を持つ壺T種（I期古段階）や、大方I・II期に限られるとされる装飾叩打文をもつ壺、白磁では玉縁の椀、時期的に同時と目される内輪鉢等が特筆され、何れも12世紀中葉頃からの所蔵と把握される。大幅遺跡の初現期、ひいては平泉藤原氏の全盛期に併行することも興味深い。

参考文献

- 田中 雄「古代・中世における手工業の発達(4)」日本の考古学IV歴史時代(上) 1967年
 沢田信一「吹遁遺跡第2次緊急発掘調査報告書」県立考古学報告書第93集 1985年
 勝田繁次郎・前田 勉「大宰府宮の輸入中國磁器について」研究論叢4 1978年
 山本吉夫「北九州の中国陶器」北九州市立考古博物館 1988年
 吉岡義勝「輪島・東北の中世磁器をめぐる問題」庄内考古学会第18号 1982年
 吉岡義勝「中世磁器研究」吉川弘文館 1994年
 伊藤弘「大蔵院跡第2次緊急報告書」県立考古学報告書第139集 1989年



第22図 建物跡配置図

報告書抄録

ふりがな 書名	ますわいそきはくつちょうじゆうこし 升川遺跡発掘調査報告書				
副書名					
卷次					
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書				
シリーズ番号	第9集				
編著者名					
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター				
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 Tel 0236-72-5301				
発行月日	西暦 1994年 3月 31日				
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間
升川	山形県 山形県鶴岡郡 遊佐町大字 直世字升川	6461	2240	39度 35分 09秒	139度 54分 45秒
					19930803~ 19930917
					2,000 m ²
調査面積	調査原因				
	県営ほ場 整備事業 (高瀬川地区)				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
升川	集落跡	平安時代 後期~ 鎌倉時代	掘立柱建物跡 廃石建物後 土壙 溝跡	あかやき土器 須恵器 黒色土器 木製品 中世陶器 磁器(白磁・青磁)	8棟の純柱建物跡をはじめとして、区画溝、道路跡、門跡等が検出された。中世前期としては、注目すべき遺構である。出土遺物では、白磁、珠洲系陶器のほか、内耳鉄綱などがあり、大方は12世紀中葉~後半に所属すると考えられる。

図 版



調査区全景（空中写真 西から）



調査区全景（空中写真 上空から）

図版 2



調査区全景（空中写真 南から）

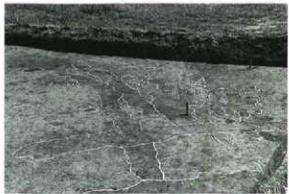


調査区全景（空中写真 北から）

図版 3



調査風景（調査区設定）



造構検出状況



調査風景（面整理）



調査風景（造構検出）



調査風景（面整理状況）



調査風景（平面図作成）



調査風景（グリット杭設定）



調査説明会風景

図版 4



調査区近景（東半部建物跡 北から）



調査区近景（東半部 北から）



調査区近景（中央部 北から）



調査区近景（東半部 西から）



調査区近景（中央～北半部 北から）

図版 5



SB 2・3北辺部柱穴列（東から）



SB 1柱穴群（南から）



SB 2・3柱穴群（西から）



SB 8柱穴群（西から）



SB 2・3柱穴群（西から）



SB 2・3柱穴群（東から）



SB 8柱穴群東部（北から）



SB 1・2柱穴群（南から）

図版 6



SP 411検出状況（南から）



EB 414検出状況（南から）



EB 180検出状況（西から）



EB 182検出状況（東から）



SP 441検出状況（南から）



SP 410検出状況（南から）



EB 232検出状況（西南から）



SP 181検出状況（西から）



SP 172検出状況（北から）



SP 189 + 190検出状況（東から）



C-2区柱穴検出状況（南から）



SP 45検出状況（南から）



EB 87検出状況（西から）



SP 189 + 190検出状況（西から）



SP 31検出状況（南西から）



柱穴・根検出状況（C-1区）

図版 7

図版 8



SK 145遺物出土状況 (西から)

SK 431遺物出土状況 (南西から)



SK 146検出状況 (西から)

S X 25 (整地層下) 遺物出土状況 (西から)



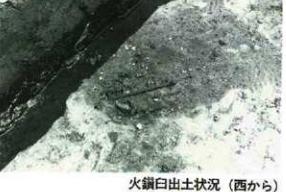
火鏡白出土状況 (西から)



S K 51検出状況 (南から)



S P 56検出状況 (南から)



S P 82・130検出状況 (西から)

図版 9



E B 86検出状況 (西から)



E B 89検出状況 (西から)



E B 194検出状況 (東から)

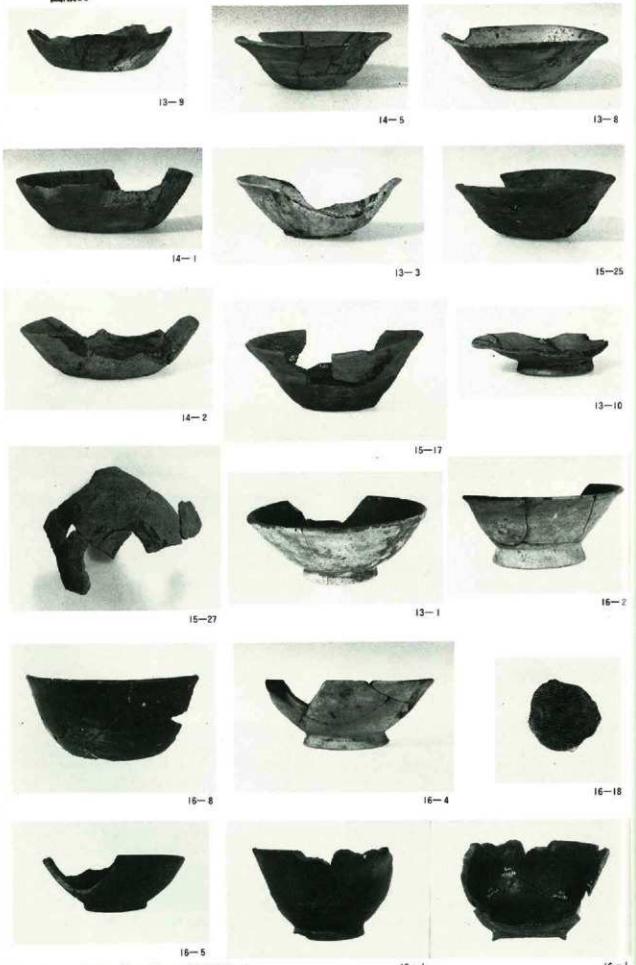


E B 100検出状況 (西から)



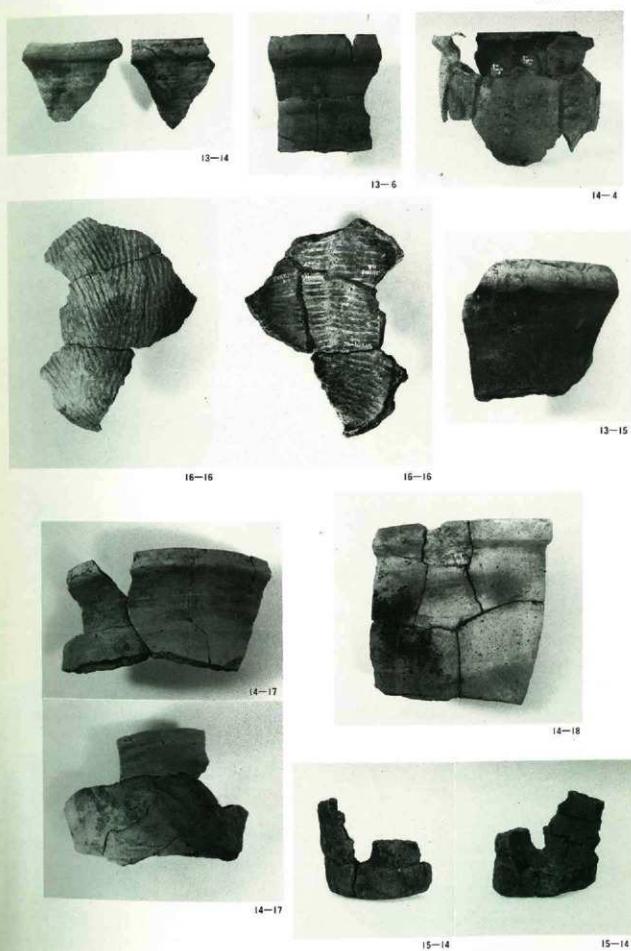
S P 85検出状況 (西から)

図版10

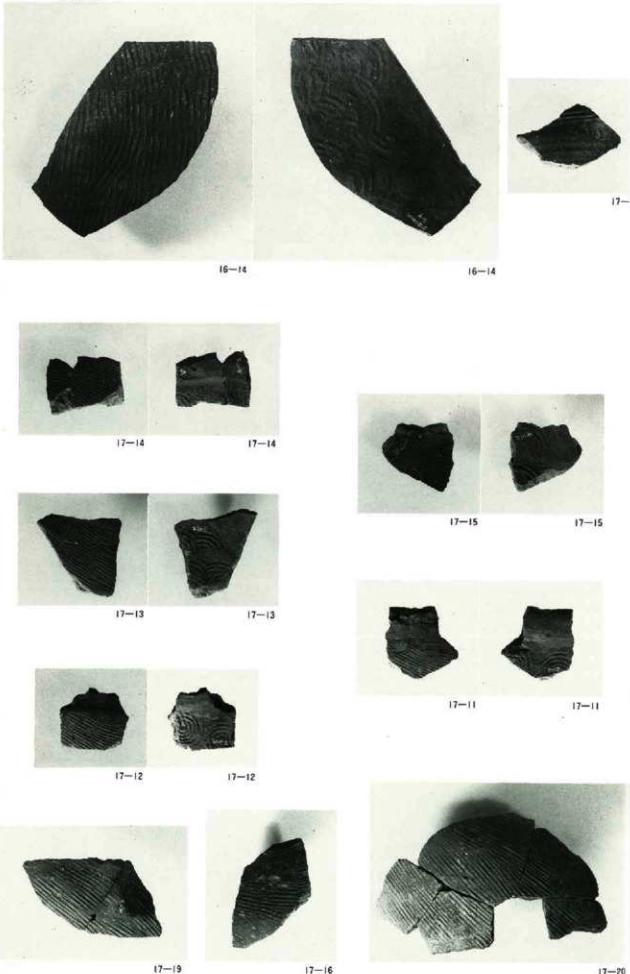


*16-5は挿図 第16図の5番を表わす

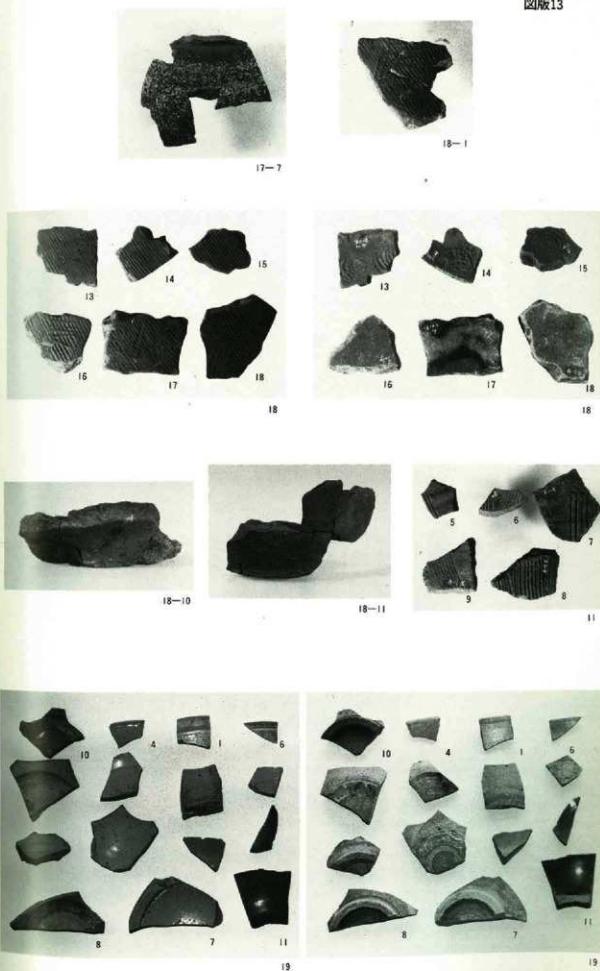
図版11

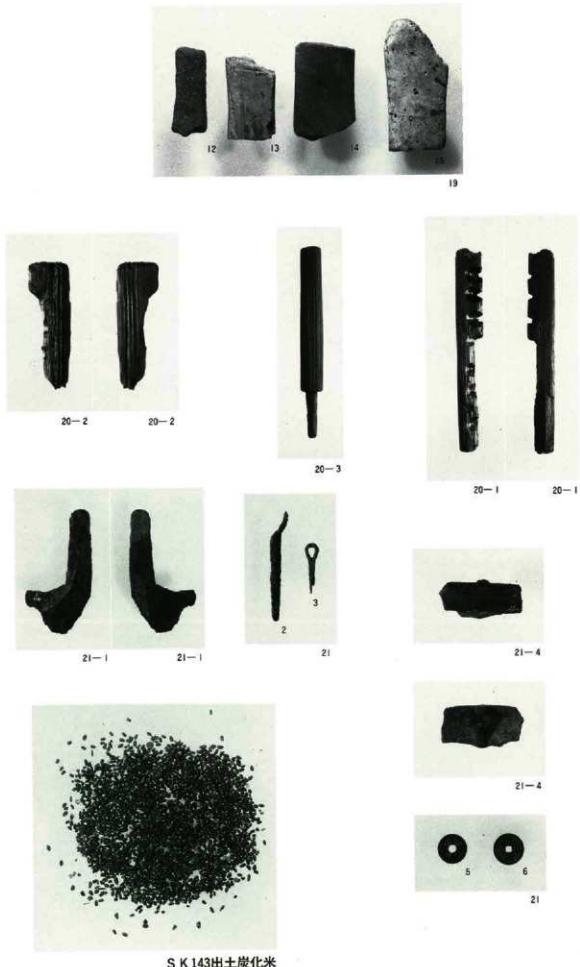


図版12



図版13





山形県埋蔵文化財センター調査報告書第9集

井川遺跡発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市井川二丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 大場印刷株式会社